

天気のいい休日に、なにか特別な時間を  
持ちたいけれど、あまりがんびりすぎるの  
はおっくうだと感じる日には、わたしは鎌  
倉文学館へ行く。

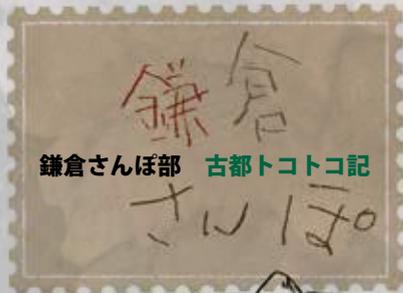
人や車の往来でざわざわしている由比ヶ  
浜通りを、ほんの少し脇道に入っただけで  
もう閑静な住宅街になり、住宅街を2〜30  
メートルも歩くと、日常から非日常へ変化  
する鎌倉文学館へとつづく、やさしいカー  
ブを描いた石畳の道が現れる。

道の両側から木々が枝をひろげ、自然が  
作った緑のアーケードとなっている。

わたしは、この木漏れ日と緑のアーケー  
ドを歩くときに、日常をあとにすることに  
している。

意識的に、日常の忙しい思考を、コート  
を脱ぐような気持ちで「これから向かう先  
に持っていない」と、自分に言い聞かせ  
てみるのだ。

鎌倉文学館の門を入ってすぐのところに  
「招鶴洞」という、5メートルほどのトン



—鎌倉文学館の巻—

ネルがある。このトンネルを通して進む先  
を見ると、まるで、トンネルが額縁のよう  
に、その先の木々と光の風景をふちどって  
いる。

このトンネルは、鎌倉文学館のなかでも、  
わたしのお気に入りのひとつだ。

トンネルをくぐるときに、まるで絵のな  
かに足を踏み入れるような錯覚を起こすこ  
とがたびたびある。

このトンネルも、わたしの日常から非日  
常への移行を助けてくれている。

ここで鎌倉文学館のしおりから、この場  
所について書いてみよう。

もともとは加賀百万石藩主、前田利家の  
系譜である旧前田侯爵家の鎌倉別荘であ  
り、昭和11年に今に至る洋館が完成。

第二次世界大戦後、デンマーク公使や佐  
藤栄作元首相が鎌倉別邸を借り、別荘とし  
て使用していたこともあるそうだ。(佐藤  
栄作元首相は、この建物の3階バルコニー  
で演説の練習をしていたと聞いたことがあ  
る。建物は2階建に見えるが、実際は3階  
建)そして、昭和58年に17代当主の前田氏  
より、鎌倉別邸の建物が鎌倉市に寄贈され、  
鎌倉ゆかりの文学者直筆原稿、手紙、愛用  
品といった文学的資料を展示することを目的  
として、昭和60年に鎌倉文学館として開館。

川端康成、小林秀雄、高見順、夏目漱石、  
芥川龍之介、中原中也、与謝野晶子…もう  
数えあげたらきりが無いほど、超著名文人  
ゆかりの資料が展示されている。

文学好きな人には、垂涎の手書き原稿を  
見ることが出来る。

そして、なんとなく昭和も感じられる。古い建物もそうだが、展示されている資料も昭和中期前後のものが多いので、昭和へタイムスリップしたような気持ちになる。

ここは鎌倉三大洋館のひとつで、三方を山に囲まれ、建物の前方には開けた芝の庭があり、その先には230株もあるローズガーデンがひろがっている。

このひろい芝生のガーデンが、わたしのお気に入りの二つ目。

その理由は、お弁当とお茶を持参して、この庭で食べるのが、大好きだから。

3月から7月まではウグイスが始終鳴いていて、青い空と山の緑を見ながら、ウグイスの声を聴き、風が頬をなでるのを感じながら食事をするのは、ありきたりなお弁当が百倍も特別なごちそうになる。

この庭では五感が研ぎ澄まされ、身体全部で食事を楽しむことができるような気がする。

七



暖かな日には、身体のなかへ、大地からエネルギーを受け取るイメージで、裸足になって芝生の上を歩いてみたりもする。ちょっと変な人に見えるだろうけど…わ

たしは変な人であることを楽しむ。

三つ目の、わたしのお気に入りには、建物2階のバルコニー。

このバルコニーからは、遠くに海が見渡せる。そして、ここにはテーブルとイスが置かれていて、わたしはここでお茶を飲みながら、持ってきた本を1時間ほど読むことにしている。

とくに真夏の暑い時期の、このバルコニーは最高だ。

海からの風が、眼下にひろがる建物の屋根の上を渡ってきて、下にひろがる世界より2〜3度はすずしい。

本を読みながら、セミの合唱のなかに、ときおりヒグラシの声が混じって聞こえるのを楽しむ。

こうして2時間ほど特別な時間を楽しみ、日常の生活へと帰ってくる。

これが、わたしの休日の楽しみ方のひとつである。

(文/N)